# 寛容から幸福を生みだそう

岡山市・岡山芳泉高３年　與曽井　優希

「早朝の鳴き声で眠れない」と、フランスの風光明媚な大西洋の島に住む雄鶏・モーリス君が都会から来た夫婦に提訴された―。この記事を読み、突然遊び場を奪われた小学生の頃の記憶がよみがえった。近所の小さな公園で、友だちといつも野球やサッカーをしていた。ある日、公園に隣接する家に誰かが越してきた。新住人は直接ぼくらに何か言うのではなく、町内会に訴えた。ボールで遊んでくださいと言わんばかりの高いネットで囲まれている公園にもかかわらず、本来「ボール遊び禁止」であることが判明し、ぼくらは〝ボールで遊ぶ権利〟を奪われた。しかし、モーリス君の〝鳴く権利〟は守られ、田舎特有の音やにおいなど「知覚的な文化遺産」を守る法律成立につながった、と記事にある。

その後、住人は引っ越したが、今、公園に子どもの声が響くことはない。苦情を言う人がいなくなったのに、なぜだろうか。この数年間で、地域の子どもから〝友だちと公園で遊ぶ〟という習慣も奪われたのだ。また、今の公園は膝丈以上もある雑草に一面覆われ、遊ぶ気にならないのだろう。ぼくらが遊んでいた頃は、みんなが走り回って地面を踏み固めていたから、雑草は目立たない存在だった。でも今は雑草が繁殖しやすい柔らかな土地になってしまった。「子どもの遊びも保護対象に加えてはどうか」との記事に大賛成だ。近所の小さな公園でさえ、一度失われた習慣や環境はなかなか戻らないのだから。

記事には他にも、たこ揚げをしていた子が「騒ぐな」と叱られた事例もあった。コロナ禍で不自由な生活を強いられ排他的、差別的になりやすい今、法整備だけでは解決できそうにない。生物の授業で免疫について学んだ。自己を守るため、自分と違う異物（非自己）を攻撃し排除するシステムだ。しかし免疫が暴走するとアナフィラキシーやサイトカインストームのように自らをも攻撃し苦しめる結果を招く。そんな免疫にも自分の子（胎児）は非自己であるにもかかわらず、拒絶も攻撃もしない〝免疫寛容〟が存在する。ぼくは自分と異なる相手を攻撃し対立するのではなく、免疫寛容が新たな生命を生み出すように、寛容し共存することで、新しい幸福の価値観を生み出せる人になりたいと思った。

都会から来た夫婦は「鶏のせいで眠れない」ではなく、「モーリス君のおかげで早起きできる」と新しい幸福観を生み出せていたら、みんなで仲良く暮らせたのかもしれない。

## 滴一滴

昨年世を去った雄鶏（おんどり）・モーリス君も喜んでいることだろう。フランスで音やにおいなど田舎特有の「知覚的な文化遺産」を守る法律が成立したと海外メディアが報じていた▼モーリスは風光明媚（めいび）な大西洋の島にすむ普通の鶏だった。ところが都会の騒がしさを逃れようと飼い主宅の隣に別荘を購入した夫婦から「早朝の鳴き声で眠れない」と提訴され、一躍有名に▼雄鶏には鳴く権利がある―。裁判所は訴えを退け、飼い主は「農村には農村の暮らしに根付いたあらゆる音がある」と伝統を守る法整備を求めた。1年半前のことである。都市と地方の分断の象徴などと言われ、世界的な耳目を集めた▼その後も第2、第3のモーリスは生まれている。欧州では放牧牛の首に付けるカウベルや教会の鐘の音。日本では除夜の鐘、風鈴や花火の打ち上げ音、子どもの声などを嫌う人が増えている▼先日も知人が嘆いていた。「たこ揚げをしていた近所の子たちが、通り掛かりの人に『キャーキャー騒ぐな』と叱られた」。ちゃんとマスクもしていたというのに何とも世知辛い▼政府は今、少子高齢化やコロナ禍の影響で地域の祭りなどの存続が危機的状況にあるとして、無形文化財・無形民俗文化財を守る登録制度の新設を検討している。ついでに保護対象に加えてはどうか。子どもの遊びや季節行事も。　2021・2・1

2021年２月１日付　山陽新聞

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。